

第2 文学文化分科会

宮沢賢治の西域童話（周 異夫）	192
近代日本における修養の言説空間	194
——読者論を目指して（王 成）	
试论志贺直哉文学的自然观（陈 多友）	197
不同的国度 相似的作品	199
——浅析《野草》与《梦十夜》（于 长敏 陈 云哲）	
『或る女』におけるフェミニズム思想をめぐって（李 先瑞）	201
有島武郎「カインの末裔」試論（冯 海鷹）	202
从《亚东时报》看晚清时期中日共同言论平台的构成（陈 爱阳）	204
论三木清的协同主义哲学（刁 榴）	206
日本明治哲学思想の受容	208
——『哲学概論』の中国語訳をめぐって（王 琢）	
翻译主体的身份与语言问题	211
——论 1930 年代初期的翻译论争（董 炳月）	
西周における「性」（孫 彬）	213
日本俳句の起源、形式与翻译（田 建国）	215
日本における異文化コミュニケーション研究の歴史と現状（盧 濤）	218
日本内容産業の現状分析及其国家政策（呉 咏梅）	220
異文化認知における「日本概況」の役割（周 潔）	222
「政冷経熱」の実態と危険性	224
——1914-1945 年の中日経済貿易関係について（黄 栄光）	
从“鬼”的寓像意义浅释日本文化的混合性（杜 勤）	226

（[目次へ](#)）

宮沢賢治の西域童話

吉林大学外国語学院 周 異夫

一、はじめに

宮沢賢治の作品には、大陸に関する内容がその詩、短歌、童話など所々に見られるが、同一作品に集中的に現れたものはあまり多くない。その多くないものの中で、大陸的要素を集中的に見せたのはいわゆる西域童話である。

西域童話の中で、はっきりとした西域のイメージを見せたものもあるし、内容あるいは思想の面で西域と繋がっていると考えられるものもある。

二、西域童話に関する論考

1、宮沢賢治の西域理解と西域童話の範囲

西域とは、漢の時代から玉門関、陽関より西側の広大な地域を指すが、厳密的な範囲が定められていない。『漢書・西域伝』では、＜南北有山、中央有河、東西六千余里、南北千余里＞と記しているが、広く言えば、狭義的西域を通して到達可能な西側諸国の土地が西域と考えられた。狭義的な西域は、大体葱嶺より東側の漢、唐の政府機関の管轄下に置かれた現在の新疆と中央アジアの一部の地域を指す場合が多い。

賢治の詩と童話の中で、西域的要素を持っているものが西域童話と呼ばれているが、内容判別と範囲認定が難しいゆえ、厳密な西域童話の定義は定められていない。

西域の地名や用語が特に詩の中で多く使われたが、童話の中では＜西域＞という語の使用例が少ない。賢治自身はこのジャンルの童話を＜西域童話＞と呼ばず、＜西域異聞＞と呼んでいた。そこから、＜西域童話＞という名称が生まれたものと考えられる。

賢治の考えていた＜西域＞は、狭義的西域のようであるが、ここで言っている＜西域童話＞の範囲は＜西域異聞＞に止まらず、賢治の考えていた＜西域＞よりも範囲が広い。それは、広義的西域の要素を持っている童話であり、作品は二十編以上も数えられる。

2、西域異聞三部作の舞台背景

＜西域異聞＞の三部作は「マグノリアの木」「インドらの網」「雁の童子」である。この三篇の作品はどのような順序で書かれているかはわからないが、みな西域出土壁画に描かれた少年をモデルにしていることが明らかである。特に、「インドらの網」の中の＜于闐大寺の廢趾から發掘された壁画の中の＞＜三人の天の子供＞が「雁の童子」の中の＜沙車大寺のあとから＞＜掘り出された＞壁画の中の＜三人の天の童子＞と深く結びついており、興味深いものである。

3、宮沢賢治が西域に惹かれた理由に対する考察

賢治は西域に興味を持ち、その要素を作品の中に取り入れた理由として、西域が通商上、あるいは軍略上非常に重要な地域だからではなく、賢治の仏教への信仰と憧憬によるものだと考えられる。

賢治が十八歳のとき大乘仏教の最も重要な経典の一つである『妙法蓮華経』に興味を持

つようになり、『漢和対照妙法蓮華經』を読んで異常な感動を覚えたという。盛岡高等農林学校地質学部研究科在学中も、宗教色濃厚な詩や短編を書いて配布したりした。

賢治は、法華經と日蓮主義を熱狂的に信奉する宗教団体国柱会に入会した後、突然家出して上京し国柱会本部に駆けつけたという過激な行動までとった。東京滞在中、法華經を文学に生かす道を模索し始めるようになったのである。このような賢治が仏教あるいは法華經発祥、伝来、または隆盛だった地方に興味を持つようになったのも当然であり、それは、仏教的思想にあふれた＜西域童話＞からはっきりと読み取ることができる。

もう一つ、漢唐時代に天山南路に栄えていた重要な都市庫車が、『妙法蓮華經』の漢訳本の著者鳩摩羅什の生地だったことも忘れてはならない。鳩摩羅什が法華經をはじめ数多くの大乘仏典を翻訳し、衆生救済に一生を捧げた。それについて法華經を篤信する賢治は知らないわけではない。鳩摩羅什の足跡が残っている土地は賢治にとって極めて魅力的であり、それは度々賢治の詩や童話に現れるようになったのも何の不思議もないであろう。

三、 西域遺跡の発掘と＜西域異聞＞三部作

1、 西域探検の風潮と于闐、米蘭の発掘

アヘン戦争後、列強が自由に中国内陸に入ることができるようになり、特に十九世紀末から二十世紀初にかけて、イギリス、ドイツ、フランス、スウェーデン、ロシア、日本などの国が競って西域探検に乗り出した。

その間、敦煌、古代都市于闐などの仏教文化遺跡が発掘された。1907年、米蘭の仏教寺院の遺跡から＜翼を持った天子像＞が発見された。

2、 米蘭の天子像壁画と＜西域異聞＞三部作

賢治は壁画出土のことを詩の中にも書いた。また、「雁の童子」の中の＜それはフランスの探検家……＞の書込みも、童子像壁画の発見が西洋探検家によるものだと賢治が認識していることを示唆している。

米蘭の壁画に描かれた天子像は「雁の童子」の他に、「マグノリアの木」と「インドラの網」にも登場し、＜西域異聞＞三部作の共通した性格を示している。

近代日本における修養の言説空間

——読者論を目指して

首都師範大学 王 成

一、問題提起

明治期に出版された修養書はまさに汗牛充棟である。經典の翻刻や注釈もあれば、説教風の講話録もある。修養論を体系的に構築しようとした著作もあれば、志士聖賢の教訓や「金言玉句」を集めた格言集や座右銘集もある。物語風の偉人伝もあれば、作者個人の実験談もある。大量に刊行された「修養」の書籍が多く読者を獲得し、宗教運動や社会教育のうねりもそれに加わり、出版メディアのさらなる発達や義務教育の普及もそれらを後押しして、「修養」が青年層を中心として民衆の間に広まったのである。そこに、明治期の読者がどのように「決まり文句」的な修養書を受容したかという問題が浮上する。本論では修養書における大衆啓蒙をめぐって、修養書の形態、出版ジャーナリズム、読書空間などの側面から、近代日本の精神文化の一環を成していた「修養としての読書」を検討してみたい。

二、修養書の流行

明治三十六年以降、藤村操の自殺事件をきっかけに雑誌の「修養」言説が一気に増えた。「修養」に関する文章は、一時期雑誌に欠かせないものとなった。従来の修養雑誌も相次いで「修養欄」を設けて、読者の趣向に対応する。「修養」は出版メディアによって更なるうねりを創りだしていた。日露戦争後、出版業の発展とともに、修養書の出版も読者の需要に応じて、著しく増えてきた。読者は出版業の発達によって活字メディアを通じて、即ち読書の形で「修養」に関する知識を提供されたのである。

この時期の「修養のために読むべき書」として書名に「修養」を冠した書物の出版実態は、『国会図書館蔵書目録』によって垣間見ることが出来る。それを見れば明治三十年から明治四十五年六月まで「修養」というキーワードで検索できる本だけでも、三百二十点あり（「近代デジタルライブラリー」）、明治三十九年から大正前期にかけての出版点数の急激な増加がわかる。

明治期における代表的な修養書には、『論語』のような經典の再興とともに、当代の有識者が書いた『修養論』や『修養』や『努力論』などがある。『修養論』は加藤咄堂の修養論の集大成であり、明治、大正期のベストセラーとして名高い。新渡戸稲造の『修養』も、この時代に作り出されたベスト・セラーである。幸田露伴の『努力論』は、明治四十五年七月に東亜堂書房から初版を出版して、大正元年十月まで一年足らずで十八版を重ねた。明治末期まで、『論語』や『菜根譚』などの「經典」を修養書として、古聖先賢の格言を無条件に熟読する読書傾向が存在した。修養論者は「修養と読書」において、心身をこめて經典に近づけるという読み方を提唱した。

明治期に、社会の「修養」機運が高まっている中、メディアによる「修養」の伝播が修養ブームに拍車をかけ、雑誌や図書の出版業も、日本の近代化とともに大きな発展を遂げた。そうした時代の中で、修養書は、読者大衆に「修養」を伝播するメディアとして重要

な役割を果たした。

三、「修養」としての読書

明治期の読書風景を描いた小説に夏目漱石の『門』がある。人生の危機に直面して、如何に「安心立命」の境地に入れるか。それは小説の主人公・宗助を悩ます課題である。漱石は人生の危機の局面から脱出して、不安を解消する道として、作品の中に修養書を読むことと参禅を設定した。宗助が『成功』や『論語』を読む場面、同僚が出勤の車中で『菜根譚』を読む場面、禅僧が『禅関策進』を読む場面などは、この時代（明治四十二年前後）に流行した「修養」としての読書のリアルな表現として、夏目漱石の修養書の果たす役割に対する洞察を読み取ることができる。

新渡戸稲造は近代的な学問方法を持って出発した学者だが、その著書である『修養』は、「通俗平易」な語り口によって「修養」の徳目を説き、近代の日本人に多大な影響を与えた。自身の私的な読書や修養体験にまつわる「随感随想」(1)を材料とし、「对手が少年か老年かも忘れ、或は如何なる位地に今日自分があるかも忘れ、又これが恥辱か名誉かさへも忘れ、興に乗じて物語った」(2)と告白したその率直さが読者に親近感を抱かせ、エリートから一般の民衆まで幅広く支持された。

『修養』は大衆向けの修養雑誌『実業之日本』に連載ののち、明治四十四年九月に実業之日本社より出版された、近代日本最大の修養書である。第一高等学校の校長であり帝国大学教授でもあるという教育界や言論界での人気と、『実業之日本』の影響力に支えられて、『修養』は明治、大正、昭和を通しての一大ベストセラーとなったのである。

明治期に流通した修養書は大衆読者を主たる対象としていたために、どのようにして彼らを説得するかという、その啓蒙性の質にはさまざまな工夫が凝らされることになった。

たとえば修養書における古典と新作との関係を見ると、『論語』や『菜根譚』のような経典が通俗化した形ではあれ原典のままで読まれるいっぽう、それらを自説の補強のために援用する『通俗修養論』や『修養』、『修養論』のような「新作」修養書が他方に存在する。そこでは、たとえば『論語』の成語がふんだんに引用されることで読者に馴染みややすさをもたらし、それを利用しながら新作が自説をより強固なものとする。この関係を、一次的書物と二次的書物の関係と呼べるとすれば、そこには、両者が相互に補足し合って、成語の流通と修養理念の浸透とを拡大させていく一種の「スパイラル」構造のようなものを見出すことができるのではないか。

「通俗性」が強調された『通俗修養論』や『修養』のようなテキストでは、その語りかけの「文法」、すなわちどのような語り口によって主張を読者に浸透させようとしたかが重要である。『通俗修養論』は、「説教」に精通した村上専精が得意の俗語調を駆使して言文一致で書いたテキストであり、いっぽう、新渡戸稲造の『修養』は、「身の上相談」ふうの語り口で「通俗平易」の啓蒙性を実現した。そしてそれらの修養書においては、読者への語りかけの手段として、「比喩」や「設疑」や「反復」などの修辞法が採用された。

たとえば新渡戸の『修養』を例にとると、「逆境にある時の心得」という章ではまず「逆境とは何ぞ」から説きはじめ、例え話や逸話や格言名言などをネタとして、「漸次法」や「起承転結」などの修辞を活用して、論旨を読者へ浸透させる。「命令」、「遠回し」、「脅し」、「勧誘」などを織り交ぜた文章は、修養書の通俗文体の一大特徴といえよう。

また、加藤咄堂の『修養論』のように、漢文脈というかたちで読者レベルを指定しつつ

(といってもこの時代のことであり、それほど少数に限定されたはずはない)、故事成語や金言玉句、ことわざ、家訓など、大衆読者の耳に馴染んだ言説をふんだんに生かした文体からは、大衆性への深い洞察がうかがえる。総じて明治期の修養書が、さまざまな方法で、みずからの主張の浸透に工夫を凝らしていたことが、これらの例からもおわかりいただけると思う。

修養論者や修養書が「古聖先賢の語を引き又其の行実を挙げること多し。(中略)古聖の一言、先賢の一行、皆之我が修養の箴たり、練心の料なり」(3)と指摘されたことからわかるように、修養と定型表現との関係はきわめて密接である。それを、近代日本文化や日本人と定型表現との関係の密接さ、と言い換えることもできるかもしれない。また、修養書の中によく引用された『論語』や『菜根譚』のような古典は一種の故事成語集としても機能し、だとしたら修養書そのものも一種の故事成語集だと言うこともできるかもしれない。いずれにしても、このようにして修養書の「決まり文句」中心的な構成や「故事成語」重視の表現は、近代日本人の精神構造に決定的な深さで食い込んでいったのである。

(1)新渡戸稲造『修養』(実業之日本社、一九一一年八月、八頁)。

(2)同注(1)、四頁。

(3)加藤咄堂『修養論』(東亜堂、一九〇九年四月。引用は忠誠堂、一九二六年二月、八頁)。

试论志贺直哉文学的自然观

广东外语外贸大学 陈 多友

对立的自然观和贯彻自我的原理是青壮年时期志贺直哉的人生信条。它体现了深受西洋精神风土影响的志贺所饱含的人生斗志和创作激情。这时期的志贺文学因之也形成了“战斗文学”的特点。然而，以大正2年滞留城崎为契机，他的人生信条发生了急剧的变化，调和的自然观凸现出来。然而扎根于自然的原始生命力并没有因此消失。事实上它反而从内里支撑起老年时期作家的调和的自然观。职此之故，之于志贺文学，调和的自然观始终没有被虚无、死亡等消极元素所吸收。青壮年时代生成并鼓动着志贺对立自然观和贯彻自我之原理的强大生命力在其后的数十年里，一直在静静地守护着老年时期的志贺文学。

大正6年，在充满能量、激昂亢奋的贯彻自我这一人生原理急剧沦落之后，志贺的生存原理暂时出现了“真空状态”。经过严肃的思考和激烈的心理斗争，调和的自然观终于作为新的人生原理开始发挥起机能作用。

志贺绝大多数优秀作品都是在此之后问世的。这些事实使人深切地感受到志贺生存信念的坚忍不拔及其文学非同寻常的生命力。如此强劲的生命律动恰好表明：调和的自然观早已横亘于作家生命的根底，像大海容纳着来自四方的生命急流或是潺潺小溪。正因为有了调和的自然观这一坚固的基础，志贺才得以克服那段黑暗的转换期，而且人生原理的直落也没有立即形成空洞。

对立的自然观易于扎根于西洋的精神风土之中。在对待自然的态度上东洋对西洋形成了二元对立。尤其是到了近代，确切地说在日本的明治维新以后，究竟怎样处理与自然的对立或调和的问题成了生存和文学回避不开的带有本体论意义的课题。志贺无疑是解决如此问题的智者和勇者。他以自己独特的文学为利器信步江湖逢凶化吉，成为绝对不败的胜者。他取胜的基础就是坚固的调和自然观和旺盛的生命力。

调和的自然观与旺盛的生命力的形成了志贺独到的个人自然观。正是如此自然观使得他如虎添翼，无须担心悲剧或败北的袭击。

从自然观的角度考察，志贺文学百分之百地属于安定牢靠的生命文学。它有别于芥川龙之介、川端康成们的悲情式的文学。始终给人“山重水复疑无路，柳暗花明又一春”的感觉，永远也不会失望或无助。

老年时期的志贺文学仍然固守着以生命力为基石的信条。

按照须藤松雄的分析，能够印证这种观点的是其文学的非感伤性。洋溢着旺盛生命力的感情、充满激情的行动，两者高度统一合为一体正是作者的人生原型，同时也是其文学造型

的原理。老年期的志贺文学，静穆稳当的调和自然观已经深深扎根于此，所以仍然难以从中发觉感伤的影子。

其次，志贺文学富于“文的弹性”。它可以形成适度的紧张，却不至于造成心理压力。叙事表达富有独自的弹性，结果它每每指示起被创作主体充电的生命力。

总之，充满以自然为根源的生命力，把握静稳的调和自然观。这是老年时期志贺文学的基石。志贺写于昭和26年、27年以及28年的日记中经常谈到风景“很美丽”，也从侧面表明调和的自然观成了他闪烁生命光芒的灯塔。

而更能体现作家如此热爱自然情愫的当数《暗夜行路》后篇终了部分的大山之行的描写。行文温婉细腻洋溢着善意，构图雄伟壮丽回旋着美感。极力表现了主人公与大自然之间的和谐融洽，以及后者所孕育着的厌离秽土超越生死的意义。

可以说整个日本文学都或多或少地能够见到这种倾向：虽然经常涉及到自然描写，但基本上都是侧重于局部，极少问津总体或宇宙。即使有所触及，也只是浮光掠影，苍白无力。然而，《暗夜行路》最后这段相关叙述无疑是个例外。主人公能够从作为自然观一极的对立自然观的角度认识到自然整体可以使人类灭绝，同时他又认为调和的自然观是唯一绝对的生存原理，它充斥于自然并在自然里扎根。

志贺文学能够这样具体地再现调和的大自然，可见它的确算得上幸福的文学。超越生死的调和的世界，充满温馨宁静的大自然，这正是志贺文学极力表现的至美主题，也是作家孜孜以求的人生境界。

不同的国度 相似的作品

——浅析《野草》与《梦十夜》

吉林大学 于 长敏·陈 云哲

『野草』は魯迅が1924～26年の間に発表された随筆集であり、「夢十夜」は夏目漱石が1908年『朝日新聞』に連載した十篇の短編小説である。両方を照らして読めばすぐ気が付くが、発想から内容まで似ているところが少なくない。「夢十夜」の中の四篇が「こんな夢を見た」で始まるが、『野草』の中の七篇が「私は夢を見た」で始まり、そして夢のことを描いている。「夢十夜」の第三夜において、「私」は「石地蔵のように」重い盲を背負って闇の夜に歩き続け、捨てようとしても捨てられない。これは生まれながら負わされた運命を指している。『野草・過客』の中では、「過客」（魯迅）は前に自分を待っているのは墓だと知っていても歩いていかねばならない。この場面も非常に似ている。また、「夢十夜・第七夜」の「私」が海へ飛び込む場面と、『野草・死火』の「私」が氷の谷へ落ちる場面とも相通じるところがあると思う。

場面の描写だけでなく、中味も似ているところを見出すことが出来る。夏目漱石は「打死をするか敵を降参させるかどっちかにしてみたい」と思うが、魯迅は「死火」で氷の谷で死を待つか、谷を出て自分を燃やすか二者択一だと言っている。

魯迅は漱石の本を読んだこともあるし、翻訳したこともある。また文章の中で漱石が自分の愛読作家の一人だと書いている。だから、魯迅が無意識のうちに漱石から影響あるいはヒントを受けていると考えても無理はないだろう。

《野草》是魯迅散文詩的代表作，寫于1924年9月至1926年4月，被認為是獨屬於魯迅自己的“新穎的形式”，是魯迅之“非凡的想象力”（錢理群語）的產物。然而，當細讀了日本近代著名作家夏目漱石1908年在《朝日新聞》上連載的小品《夢十夜》之後，就會發現二者在形式上有着驚人的相似之處，在內容上也可以找到相近的地方，尤其是某些場面的設計十分接近。

魯迅稱漱石是他“最愛看的作者”之一，並親自翻譯過漱石的文學作品，那麼，他對漱石的《夢十夜》這部別具特色的作品自然是相當熟悉的。《夢十夜》共寫了作者的十個夢，其中有四篇直接以“我做了這樣一個夢”開篇，而在《野草》包括《題辭》在內的二十四篇文章中，竟也有七篇以“我夢見……”開頭。在形式上即便不是有意模仿，在潛意識中最起碼也有《夢十夜》作底片。《夢十夜》的《第三夜》中，“我”背着一個沉重的孩子（人的命運）在“漸次暗淡”的道路上艱難地行走，又無法將其丟棄。而《野草》的《過客》中，“過客”（即魯迅）明知前面是墳墓，還要不停地走下去，仿佛前面有一種“聲音”在呼喚着自己。雖然前者是無奈之舉，後者是主動的選擇，但在表現手法上頗為接近。而在《野草》的《死火》中，“我”“墜入冰谷”的場景描寫，又不能不令人想到《夢十夜》中的《第七夜》，“我”縱身從船上跳入波濤洶湧的大海的面面。

表現手法的接近只是一種外在的“貌合”，若細致閱讀兩部作品，在其內蘊方面也能找出

相通之处。夏目漱石说自己是“孤军奋战”，且战斗的对象不是具体的某个人，而是那些“于世不利”的陈风旧俗，并说“即便战死，还能得到慰藉——我曾全力以赴地战斗过”。而鲁迅也是，宁愿战死，不可等死，所以才明知道前面是“坟”也要走下去。鲁迅在《死火》中还写道，“死火”要么就在冰谷中冻死，要么就跃出冰谷把自己烧尽，虽然结果都是死亡，但烧尽至少还可以灿烂的光辉，给人类带来一点温暖和光明。《野草》中《这样的战士》还写到，“战士”走进了“无物之阵”，他明明觉得四周都是敌人，却又看不见，抓不着。“他举起投枪”，“一切都颓然倒地——然而只有一件外套，其中无物”。由此可见，鲁迅和夏目漱石两个孤军奋战者的战斗意志、战斗决心、战斗的对手又何其相似。鲁迅如此推崇夏目漱石，恐怕他不仅仅是从漱石的作品中得到了构思的启发，还从思想深处产生了共鸣吧。

『或る女』におけるフェミニズム思想をめぐって

洛陽外国語学院 李 先瑞

0、始めに

今頃フェミニズムが全世界でブームになっている。筆者は日本のフェミニズム文学に非常に興味を持っている。殊に男性作家有島武郎のフェミニズム思想に惹きつけられている。本稿は有島武郎の代表作の『或る女』に現れているフェミニズム思想をめぐって展開しようと思う。

1、フェミニズムとフェミニズム文学

フェミニズムは男女の平等を強調し、個性解放を求める女のイメージを追求しようとした。女性が自我解放を求めるべきだと主張する文学は全部フェミニズム文学の範囲にはいる。ここで先ず女流文学とフェミニズム文学との区別をあきらかにしておく。女流文学は女性作家が創作したもので、作品の内容は必ずしも女性の解放に触れるものではない。それに対して、フェミニズム文学は思想の面で女性の解放を追求する。フェミニズム文学は必ずしも女性作家の手によるものでなく、男性作家もフェミニズム文学が創作できる。女流文学は平安時代に遡れるが、フェミニズム文学は明治末期から始まったものである。

2、有島武郎の女性観

20世紀の始ごろ、日本の自由民権運動が盛んだった時期に有島武郎は1910年に『或る女のグリンプス』を発表し、世俗に反抗し、勇敢に女性の解放を追求する女、早月葉子のイメージを浮き彫りにした。この作品は日本近代文学の名作であると同時に、フェミニズム文学の傑作でもある。

有島武郎のフェミニズム思想は概していえば次の通りである：

女性は男性の奴隷である。実生活の上で女性は男性に依託しなければならない。女性は身心の面では能力が退縮した。その結果、女性は忍んで彼女の肉体を男性に提供することを余儀なくされた。人類社会の男女間の悲劇はこのようにして生まれた。

有島武郎のフェミニズム思想は主にアメリカに留学していた頃に出来たものである。

3、『或る女』から見た有島武郎のフェミニズム思想

有島武郎は『或る女』において、女性は独立した人格を持ち、女性は男性に劣らないというような思想を表した。

有島武郎のフェミニズム思想は西洋の伝統的フェミニズム思想に由来している。

有島武郎「カインの末裔」試論

清華大学 馮 海鷹

作品の題目は「カインの末裔」であるが、日本にある未開地、北海道を舞台とするこの物語にカインと言う名前はどこにも出てこない。この題目は物語の言説ディスクールの一部として、我々にもう一つのコンテクストを提示している。それはつまり、旧約聖書に書かれているカインの物語である。聖書の世界では、カインが神に背いた者、神から恩恵を受けた罪人として描かれている。言うまでもなく、仁右衛門というリアルな人間と、カインという伝説を縫い合わせたものがこの物語である。その縫い目に介在し、両者を繋ぐ働きをするのは、語り手に他ならない。その働きがどのように行われているのか、本稿では究明したい。

…略…市街地のかすかな灯影は、人気のない所よりも却て自然を淋しく見せた。彼れはその灯を見るときもう一種のおびえを覚えた。人の気配をかぎつけると彼れは何んとか身づくろひをしないではゐられなかつた。自然さがその瞬間に失はれた。夫れを意識する事が彼れをいやが上にも仏頂面にした。「敵が眼の前に来たぞ。馬鹿な面をしてゐやがつて、尻子玉でもひっこぬかれるな」とでも言いそうな顔を妻に向けて、歩きながら帯をしめ直した。(傍線筆者、以下同じ)

「市街地の灯影」、「人の気配」、それは智慧、文明、また経済状況の豊かさの指標である。仁右衛門はそれに対して「一種のおびえ」を感じる、と語られている。しかし、そのおびえの表象はどのようなものであろうか。彼は市街地の人を「馬鹿な面をしてゐる」「敵」だとみなしている。「馬鹿な面をしてゐる」「敵」に「おびえを覚え」る、という一見矛盾する表現、そこには、相手を劣位に置くことによって、自己の立場を逆転させようとする心理、言わば一種のコンプレックスが介在している。このコンプレックスは仁右衛門の性格全体を貫いているものである。「馬鹿な面をして」云々という言葉についての内的言説と、「一種のおびえを覚える」という出来事についての純粹ディエの物語の間にズレが生じたのは、語り手が物語言説をコントロールしているからである。このような語り手に媒介された物語言説によって、仁右衛門像は常に、凶暴無知な小作農と、自然界、人間社会の両方に敗北した哀れな被害者、という二つのイメージの間で揺れている。

人間の顔——殊にどこか自分より上手な人間の顔を見ると彼れの心はすぐ不貞腐れるのだった。

仁右衛門は声の主が笠井の四国猿奴だと知るとかつとなつた。笠井は農場一の物識

りで金持だ。夫れだけで癩癩の種には十分だ。(傍点原文)

「あたり近所の小作人に對して二言目には喧嘩面をみせ」、場規を平気で破る仁右衛門が「不貞腐れる」のも、癩癩を立てるのも、相手が自分より「上手」だということを知っていることに起因する。そのような自分と他者の差を認識しているからこそ、仁右衛門が凶暴な反応を示すのである。言い換えれば、彼はそれを知ることには耐えられないのである。作品の中ではディエゲーシスとミメーシスが常にこのように、それぞれ違う方向を志向する。例えば、仁右衛門が場規に違反して、亜麻を大量に作ったことに関する記述であるが、

「こんなに亜麻をつけては仕様がねえでねえか。畑が枯れて跡地には何んだつて出来はしねえぞ。困るな」

ある時帳場が見廻つて来て、仁右衛門にかう云つた。

「俺らかも困るだ。汝れが困ると俺らが困るとは困りやうが土台ちがわい。口が干上るんだあぞ俺がのは」

仁右衛門は突剣食にかう云ひ放つた。彼れの前にあるおきては先づ食ふ事だった。

「汝れが困ると俺らが困るとは困りやうが土台ちがわい。」の云々を「突剣食に」「いい放つた」仁右衛門、その理由については、「彼れの前にあるおきては先づ食ふ事だった。」と説明されている。語り手はここで亜麻の大量生産を禁じる側、と、禁を犯す側とを対照し、仁右衛門の反発を正当化しようとしていることが分かる。しかし、「畑が枯れて跡地には何んだつて出来はしねえぞ。困るな」という帳場のことばは、決して自分が困ると言っている訳ではない。もしそれが、場規を違反していることによって、自分が場主に怒られるという意味を込めて、言っているのであればともかく、そうではなく、帳場は明らかに畑が枯れてしまうことを指しているからである。「畑が枯れて跡地には何んだつて出来はし」なくなれば、まず困るのが仁右衛門自身にほかならない。それなのに、「彼れの前にあるおきては先づ食ふ事だった。」という語り手のこの一文によって、仁右衛門は亜麻を沢山作らざるを得ない惨めな立場に置かれたことがわかる。

ミメーシスが提供している情報が仁衛門という小作農の物語であるとすれば、語り手によって圧縮されたのは、まさに旧約のコンテクストを背景にメタファー化された、カインの物語であろう。作品の表題と、作品の内容の間の異質性のように、語りとミメーシスもまた、我々に一種のコントラストを見せてくれた。それは異質的なものを同質に縫合する語り手の必死の作業から生じた違和感である。

从《亚东时报》看晚清时期中日共同言论平台的构成

清华大学外语系 陈 爱阳

《亚东时报》创刊于 1898 年 6 月，在该报创刊前后，中国新闻事业虽处于蓬勃的成长期，但是由于戊戌变法这一特殊的历史事件的影响，当时很多报刊三缄其口，抱着不谈国事的态度。这样，办报地点位于租界内，由日本人参与创办的《亚东时报》在当时的言论界中，就处于一种相对比较特殊的地位。该报的发起者为日本人创办的“乙未会”，参加这一团体的人员，有很多也同时参加了东亚同文会，在后来的中日关系中起到了举足轻重的作用。同时，一些具有先进近代思想和深刻忧患意识的中国人也是该报的主要撰稿人，所以针对中国内政和外交的诸多言论，往往无所顾忌，因而也就比较完整地反映出了当时的社会状况和所谓“亚洲主义”在中日一部分知识分子中间的影响。《亚东时报》为当时客观存在着的这种思潮提供了一个理想的平台，通过对于这份报刊的研究，可以对当时生活在中国国内的日本人的对华观念和亚洲观念做一个虽然未必完整但或许会相当接近于真实的了解；同时，想要了解近代日本人在华的文化活动，《亚东时报》无疑也可以说是一个比较完整的标本。

由于年代久远，围绕着《亚东时报》所发生的很多事实已经逐渐淹没在漫漫的历史长河之中，对于《亚东时报》的概括性的评价虽有，但是版本诸多，莫衷一是。特别是由于资料所限，往往不容易对于那个时代的出版物的具体文本作出分析。这篇论文首先是对于该报的创办时间和编辑者做了钩沉和廓清，希望能够从整体上把握；然后集中对于其中关于“支那保全”和针对“支那保全”的日本人态度做出了立足于报刊文本的分析和归纳。通过这样的一些分析和归纳，希望能够从客观上反映出同样位于这一共同言论平台的中、日各色人等的心态，不论这种种心态有多么接近，还是有多么不同，如果能够通过研究和分析《亚东时报》，尽量接近真实地还原了当时的思想和基于不同立场的各种论调，这篇文章也就可以算是完成了它的使命。

关于《亚东时报》的创刊时间、组织创刊的机构和主要编辑人员，国内的几种研究新闻出版史的著作说法并不统一（详见文章内容），根据由日本东亚同文会编辑的资料和对《亚东时报》的分析，可以比较肯定的是，创刊于 1898 年 6 月间的《亚东时报》，是由日本人组织

乙未会自主创办的。乙未会的成员如白岩龙平、河本矶平、岸田吟香、安藤阳州等人同时也不同程度的成为该报的撰稿人。在东亚同文会成立以后,《亚东时报》受到了该会的支持,但是也由于该会的支持,使得《亚东时报》最后并入了《同文沪报》,历时不足两年而夭折。这份杂志的主要编辑和撰稿人为日本的山根立庵(虎之助)和中国的唐才常,同时其编撰人员应当还包括章太炎、宋恕等人。

《亚东时报》的文本分析是另外一个比较主要的内容。既然是一个中国维新派和日本在华势力的共同的言论平台,比较接近的思想就应该是这个报刊的最基本的出发点。在《亚东时报》中,这个最基本的出发点就是脱胎于“日清同盟论”的“支那保全论”。这种所谓“支那保全”的观点,在很长时间以来被我们的一些研究者评价为“借保全之名,保留日本独吞中国的机会,务使日本在对中国的侵略中,不落在他人之后”,但是仅仅以文本论,在《亚东时报》所载的文章中,并不仅仅是日本人鼓吹着这样论调,一些当时中国的知识分子,不管是出于“两害相权取其轻”,还是为了“以夷制夷”,也都持有类似的想法。不同之处仅仅在于,日本人由于在中日甲午战争中的胜利,颇有居高临下,指点江山的态度;中国人则是更多一些忧心忡忡的味道。

同样是立足于这个言论的平台,同为日本人,对于包括“支那保全”在内的一些思潮和事件的看法也不尽相同,其中有相当多的“大陆浪人”并不执着于日本本身的利益诉求,甚至可以说是相当真诚并且怀抱着来源于政治幼稚的美好想象。这种想象与当时以唐才常为首的围绕在《亚东时报》周边的中国人的天真和幼稚有诸多相通之处,这样就促成了贯穿《亚东时报》的中日双方人员共同的“兴亚”和“保全支那”的梦想的形成。在当时看起来,这一梦想无疑非常诱人。可是今天,当我们站在100多年后的立场上,再来重新审视这个创刊于1898年的《亚东时报》,当想到这个报纸刚好位于1894年中日甲午战争和1900年日本出兵最多的8国联军侵华战争之间,再联想到“危机日迫,两帮(邦)苟协力以当欧美诸国”的提法,似乎只能感觉到历史冰冷的幽默。

论三木清的协同主义哲学

北京工业大学外语学院日语系 刁 榴

三木清は近代日本において最も代表的な哲学者の一人であり、近代日本思想史において重要な人物でもある。筆者は三木清が昭和研究会入会前後に発表した評論と、彼が執筆した『新日本の思想原理』及びその続編『新日本の思想原理・続編——協同主義の哲学的基礎』を取りかかって、三木清の「東亜協同体論」と「協同主義」の哲学を考察した。この上で、「三木哲学との関係」、「結果として」、「願いとして」、「進歩性」、「現代からの視点」という五つの面から三木清の「東亜協同体論」と「協同主義」の哲学を総合的に評価した。

三木清が主張した協同主義は彼の「三木哲学」が政治分野における展開であり、実証的な「構想力」と考えられる。三木清の協同主義の哲学を論じる場合、侵略戦争の実質を美化したという客観的結果を認識しなければならないほかに、行為そのものへの分析を通じて三木清および同時代の日本の知識人の信念とその挫折的な思想的プロセスを解説すべきであると思われる。三木清は「天皇制国家権力の御用イデオロギー」を展開するために、協同主義の哲学を提出したわけではない。彼の協同主義は反帝国主義と反全体主義的性格が含んでいるので、日本至上主義的な「東亜新秩序論」及びその後の京都学派が提出した「世界史的哲学」と比べると、相当の進歩性を持っていると考えられる。一方、60年後の今日においては、我々は新たな視点で三木清の協同主義の哲学を読み直して、今日の地域共同体の協同的發展ないし全世界の共生發展への示唆をも読み取れると思われる。

三木清（1897—1945）是近代日本最具代表性的哲学家之一，也是近代日本思想史上的一个重要人物。三木清的生涯多次出现戏剧性的变化，他的哲学思想看起来也复杂多变，令人费解。他先学于日本现代哲学的宗师西田几多郎，后又留学欧洲师从新康德学派的李凯尔特和存在主义大师海德格尔等人。曾经是讲坛哲学的最有力的接班人，后来却作为在野思想家活跃于论坛；他曾经非常接近马克思主义、参与创设无产阶级的文化运动机构，后来又一度非常接近当权者、参与策划为侵略战争提供理论依据的东亚协同体论。对此，本文主要考察和研究三木清在昭和的法西斯主义思潮下所提起的“协同主义”的哲学，希望借此解读出三木清和同时代的知识分子的理想及其挫败的思想历程。

在20世纪30年代日本全面走向法西斯化的时候，明治中期开始泛起、昭和初期势力渐盛的“日本精神论”在政府的纵容与支持下，迅速向法西斯主义化的国家主义演变。大川周明、北一辉等公然炮制日本型法西斯主义理论，直接为军国主义提供理论根据。京都学派的右翼哲学家们也提倡“世界史的哲学”、“战争哲学”，为日本的侵略战争作哲学论证。在这种高扬的法西斯主义思潮中，为战争提供理论依据的东亚新秩序论和东亚协同体论等迅速泛起和蔓延，加入“昭和研究会”的三木清所提出的“协同主义”哲学也成为战争理论的一环，充当了为侵略战争辩护的角色。

笔者从三木清加入昭和研究会前后所发表的评论、由他执笔起草的《新日本の思想原理》及其续篇《新日本の思想原理・续篇——协同主义的哲学基础》着手，分析论述了三木清的东亚协同体论和协同主义哲学。

三木清的“协同主义”的内容大要首先体现在他的评论文章中，他站在“历史的现实”的立场，在承认“既成事实”的基础上，构想他的新的协同主义的“世界史”的哲学。在《新日本的思想原理》中，三木清较为系统地铺开了评论文章中所体现出来的东亚协同体论的大要。《新日本的思想原理》由：“支那事变的意义”、“东亚的统一”、“东亚思想的原理”、“新东亚文化与日本文化”这四个部分构成，其主旨在于揭示卢沟桥事变的思想意义并提供解决事变的处方，强调战争对日本的意义、对世界史的意义，以及在这个基础上建构政治、经济、文化、国防等所有领域的东亚协同体的必要性。三木清在中日战争的扩大中发现了日本行动的世界史的意义，主张事变可以成为空间上统一东亚、时间上解决资本主义问题的契机，构想一种包容并超越了一切的普遍主义的哲学。他认为他所构想的是一种既超越了西洋中心主义、又克服了抽象的东洋主义的，具体且普遍的世界史统一的理念，只要这种世界史的哲学成为日本的行动原理，就能完美地解决卢沟桥事变。在《新日本的思想原理·续篇——协同主义的哲学基础》中，三木清用其哲学用语对《新日本的思想原理》加以详细叙述，试图为“新日本的思想原理”提供哲学上的基础。其内容由“绪论”、“协同主义的基点”、“协同主义的实在论”、“协同主义的逻辑和认识论”、“协同主义的社会观”、“协同主义的历史观”共六个部分构成，字数虽然比《新日本的思想原理》多了一倍，但同样是抽象的和折衷的。

对于三木清的协同主义哲学，笔者从与三木哲学的关系、客观结果、主观愿望、进步性以及最终的无奈、现代的视角这五个方面作出了综合评价。

首先，三木清所主张的协同主义哲学是他一贯来的哲学的发展，由《历史哲学》而成立的三木哲学与协同主义哲学有着内部的亲和性。协同主义哲学是三木清的“构想力的逻辑”在政治上的展开，是一种实证的“构想力”。其次，对协同主义哲学的评价，除了必须看到它在意识形态上欺瞒性地美化了侵略战争的客观结果之外，还应该从行为本身进行分析，究明三木清和同时代的日本知识分子的信念以及他们的思想历程，解读他们在侵略战争这一历史条件之下的苦恼和挫折。三木清提出协同主义哲学的主观意愿并非为了展开“天皇制国家权力的御用意识形态”，他的协同主义包含有反帝国主义、反全体主义的性格，与极端的日本至上主义的东亚新秩序论和后来京都学派的“世界史哲学”相比具有进步性。他认为，解决“卢沟桥事变”不能依靠殖民地的统治或者帝国主义的侵略，东亚的统一必须是各国平等的统一。高山岩男等人的“大东亚共荣圈”思想的重点在于肯定日本的“东亚盟主”的地位，而三木清的侧重点则在于对日本帝国主义的批判。另一方面，我们在60多年后的今天还可以从另一个角度来重读三木清的协同主义哲学。他关于协同主义的思索其实可以为我们今天的各种区域共同体的协同发展，乃至全球的共生发展提供某些参考。因为三木的协同主义哲学中，协同体是超越民族的，但在协同体之中各民族又是相互独立的。差异和差异性协同主义的本质上的构成要素，三木所强调的类比是要求种的多样性必须在共生中保存下来，可以说，他的协同体是基于文化的异质性和文化间交流的原理的新的历史模型。

日本明治哲学思想の受容

——『哲学概論』の中国語訳をめぐって

暨南大学外国語学院 王 琢

1902年2月に、王国維は日本に留学し、藤田豊八の推薦で東京物理学校に入学。四、五ヶ月の後、足の病（脚気）がかかり、羅振玉の勧めにより帰国した。その当時羅氏は南洋公学東文学堂監督に就任しており、王国維もその学堂の執事を担当し、暇なとき、藤田に英語を学び、また『農学報』と『教育世界』に翻訳を載せた。日本留学の前に翻訳した藤沢利喜太郎著『算術条目及教授法』は『教育世界』第14-18号に連載された。8月に牧瀬五一郎著『教育学教科書』を翻訳し、『教育世界』第29、30号に掲載し、後に『教育叢書二集』に収入、『教育世界』雑誌社に出版された。その年、また桑木厳翼著『哲学概論』、元良勇次郎著『心理学』、『倫理学』を翻訳して、何れも『哲学叢書初集』に収入、『教育世界』雑誌社に出版された。

桑木厳翼（1874-1946）哲学者。文学博士。東大で井上哲次郎、ケーベルに学び、一高、京大教授を経て1914-1935年東大教授。新カント学派の紹介に努め、西田幾多郎と並び日本哲学の指導的役割を果たした。大正期に文化主義を提唱、啓蒙活動を行った功績は大きい。著書『カントと現代の哲学』『ニーチェ氏倫理説一斑』『デカルト』『性格と哲学』『倫理学講義』『文化主義と社会問題』『哲学的教養』などがある。

王国維の訳本を見るなら、忠実な翻訳だと言えよう。一目で見て、原作の「の」を「之」に、「と」を「與」に変えただけに思われるかもしれないが、これは所謂漢文調であり、その時代、つまり日本における言文一致運動の最初、中国における白話文運動の寸前という段階の言語表現であったため、このような表現になったのであろう。ところが、王国維の訳本の文体は、同時代の中国の中においてみると、なかなか「新しさ」を持っているようである。訳本の全体から見るなら、忠実な翻訳だと言える。翻訳の標準と来たら、王国維と同時代の嚴復は「信、達、雅」という三つの標準を提出したが、学術著作の場合、何と言っても、「信」＝「忠実」が一番大切であろう。王国維は翻訳の標準について、専ら論じたことはないが、その翻訳実践から容易にその忠実さを検証することができる。

なお、論文『論新學語之輸入』の中で、反面的な教訓として、王国維はその同時代において一番有名な嚴復氏を「嚴氏は造語の功は固より多い、しかしその不当の所もまた少なくない」と非難した。王国維は嚴訳から、次の例を挙げた。

Evolution——天演 Sympathy——善同情

王国維は「天演は進化、善同情は同情と比べるなら、原語のEvolutionとSympathyを対比して、どちらが得、どちらが失、どちらが明、どちらが昧、凡て少し外国語の知識を有するものなら、判別することができる」と批判した。其の上に、また「宇宙」のことも「不適當な古語」の例として挙げた。

Space——宇 Time——宙

というように、こういう簡単に「Space」「Time」の場合には、「宇」「宙」で対応してもさ

しつかえないかもしれないが、「Infinite Space（無限的空間）」「Infinite Time（無限的時間）」の場合には、どうなるであろう。そしてもっと繊細な空間と時間の感覚の場合には、宇宙では該当するはずはないのではないか。なぜなら、「時間 Time 時間者、對空間而言，自無窮之過去經過而至現在，又連無窮之未來，而其間包含萬端之出來事者也」、「空間 Space 空間者，謂包含一切物質世界，擴于左右前後上下無窮者，佛所謂虛空，莊子所謂宇是也」なのであり、莊子の「往古來謂之宙，四方上下謂之宇」により一括されないからである。そんな疑問を持っていながら、王国維は次の結論をした。

日本人はよく二文字をつかい、其の中で通じられないものは、さらに四つの文字を以て表す。それに対して、中国人は一文字をつかうのに慣れている。精密か、不精密か、すべて茲にある。

と。中国人は一文字に慣れているのに対して、日本人は二文字を使って物事の内容を表す。二文字ではっきり表せない場合は、三文字、四文字で表す。「精密か、不精密か、凡て茲にある」。そんな現実を認めた上で、王国維はわざわざ二文字、三文字、四文字の漢字で表記した日本語の学語をそのまま中国語に「因襲」して、「中西学語对照表」を作成したのである。その中の大部分は、今日までに至っても、まだ使われている。いや、むしろもう通用する学術用語として流通している。

たとえば、『教育学教科書』に附録した「哲学小辞典」には、

想像 Imagination 伸縮或分合既有之觀念，而新構造一種之觀念也。

物質 Matter 物質者，謂定質流質氣質等，于空間内占位置，于時間内運動也。

意識 Consciousness 意識者，謂精神全體活動，而念念起伏於其間者也，凡精神現象皆起于此意識中，在意識外者，人不得知之。例如睡眠中，言語不自知之是也。

唯物論 Materialism 唯物論者，唯心論之反對，謂精神心自身體物中之腦出而由此以説明心者也。

などがあって、それらは今も流通しているものである。

一気に『教育学』『教育学教科書』『哲学概論』『心理学』『倫理学』を翻訳し、出版した後、明治学術思想によって鍛えられた王国維はそれらの学問の普及に力を入れ、旺盛な研究に努めて、雑誌『教育世界』で大活躍した。それは1903年から1907年にかけてのことである。わたしたちはその発表論文一覧表でその業績を纏めることができる。即ち、哲学、美学、文学は11、教育、美育は12、中国哲学は15、西洋哲学、美学、文学は34、総計72となる。まず注目されたいのは、その学術論文の第一弾としての『哲学解惑』である。

王国維によれば、哲学は中国における所謂理学である。艾儒略『西學（發）凡』には「費祿瑣非亞」という語があるが、その意を訳さなかった。「哲学」という語は元々日本より始まった。日本は自然科学を理学と称する。「費祿瑣非亞」を理学ではなく、哲学と翻訳した。我国の人士はその名に恐れて、その実を察知しない、遂に哲学を詬病と看做す。即ち名の不正の過ちに過ぎない。という。その当時、張之洞を初め、数多くのエリートは哲学を一

種の流行する病と看做している、そして哲学を名学に改称しようと考えた。

それに反して、王国維は『哲学辨惑』を発表した。王国維は、「哲學 Philosophy 哲學者，總合萬有之知識，統貫各學科之原理原則，最上最高之學也」ということをよく納得し、「哲學は有害の學ではない」「哲學は無益の學ではない」「哲學は中國の固有の學である」ことを論証し、「中國における現時の哲學を研究する必要」「西洋哲學を研究する必要」と主張した。

尤も異議されたいのは、我国において上も下も日々に教育を言う。しかし哲学を言うのが好きでない。教育を言おうとすれば、教育学を言わなくてはならない。教育学は、実に心理学、倫理学と美学の応用に過ぎない。心理学は自然科学として、哲学から離れたことは、ごく最近のことである。倫理学と美学の如く、また哲学の大部分を占めている。今人間の心意には、知力と意志と感情を有する。その三者の理想は曰く真、曰く善、曰く美。哲学は実にその三者を総合してその原理を論ずるものである。教育の宗旨は真善美の人物を養成するに過ぎない。だから教育学における理想はすなわち哲学における理想であると言ってもさしつかえない。西洋の哲学史、教育学史を読んでみて、哲学者は教育学者ではなかった例があるが、教育学者は哲学を通曉しないものはいない。哲学が分からなくて教育を言うのは、物理、化学が分からなくて工学を言う、生理学、解剖学が分からなくて医学を言うのと、なにか異なるのか。今は日々に教育を言い、倫理を言ったのに、唯哲学を廃しようとするのは、理解できない第三の問題である。

と。今では、多分問題にならない問題であろうが、これが百年前の中国における学術思想の現実であった。これを纏めて見ると、王国維の根本方針を知ることができる。つまり、1906年に発表した『奏定經学科大学文学科大学章程書後』では明らかになった通り、文系の何れの科も、『哲学概論』、『教育学』、『外国文』の授業をしなければならない、四つの科は、『心理学』、『名学』、『美学』、『中国哲学史』、『西洋哲学史』の授業をしなければならない。王国維が目指したのは、恐らくそれらの科目による新思想＝新学語を中国に輸入することであろう。

翻译主体的身份与语言问题 ——论1930年代初期的翻译论争

中国社会科学院文研所 董 炳月

1930至1931年间，以无产阶级文学的兴起和苏联文艺的译介为契机，京沪文艺界发生了一场关于翻译问题的论争。代表性的论争文章主要有四篇，这就是：梁实秋《论鲁迅先生的“硬译”》；鲁迅的回应文章《“硬译”与“文学的阶级性”》；瞿秋白的《论翻译》（就《毁灭》翻译问题写给鲁迅的信）；鲁迅的回信《论翻译——答J. K. 论翻译》。这场发生在“翻译洪水泛滥”（鲁迅语）时期的翻译论争涉及思想、语言、思想与语言的关系等不同层面，是清末以来中国现代译介学形成过程中的诸多基本问题在特定文化环境中的表现。

鲁迅《“硬译”与“文学的阶级性”》一文的题目表明讨论对象是被置于语言学和社会学两个层面来表达的。梁实秋的批评是针对鲁迅所译卢那察尔斯基的文艺评论集《文艺与批评》而发，在其批评中，从语言学（所谓“硬译”）层面上提出的问题同时也是社会学问题（阶级问题）。鲁迅洞察了这一点，因此将《论鲁迅先生的“硬译”》视为梁实秋早前发表的《文学是有阶级性的吗？》一文的“余波”，引伸出“文学的阶级性”并展开讨论。论争的实质是无产阶级文艺思想与新月派政治意识形态之间的冲突。从这里可以看出在中国现代文化史上翻译活动作为一种“话语行为”与国民国家建设之间的密切关系。鲁迅对《毁灭》这一文本的选择以及瞿秋白所给与的肯定同样表明了这一点。这涉及译者的阶级立场和社会身份如何决定着翻译对象的选择。

无论是在有关“硬译”的讨论中还是在《毁灭》的讨论中，梁实秋、胡适、赵景深等都遭到了鲁迅和瞿秋白的否定。必须注意的是被否定者多为留学英美人士，而否定者（以及他们肯定的曹靖华）都是亲苏俄的知识分子。因此上述冲突之中隐藏着不同外来文化传统的冲突，具体说来是白璧德德人文主义理论与马克思主义的冲突。

鲁迅翻译的是苏联文艺作品，但其翻译是经由藏原惟人等人的日语译本“转译”而来，在其翻译过程中俄语、日语、汉语三者发生了直接关联。不仅如此，在相关讨论中鲁迅还表达了自己的日语观。而当英美文学出身的梁实秋、赵景深等人介入讨论的时候，英语（以及以英语文本为对象的翻译观念）亦介入进来。就是说，这场讨论有日语、俄语、英语等三种语言作为背景，现代汉语的成长过程受到了此三种语言体系的潜在制约。“硬译”现象的发生是译者在思想和语言两个层面上未能确立主体性的结果。在思想的层面上作为主体被认同的是苏俄文艺思想，在语言层面上为了保持原文的真实性是以译文的“硬”为代价，尚处于成长期的现代汉语基本处于“被塑造”的状态。而从译者的价值倾向来说，“硬译”表明了建立“主体性”的努力。

论争双方的思想冲突并没有影响在传达层面上对“硬译”的一致否定。“硬译”本来是鲁迅的自我评价之辞，对于“硬译”在功能层面上与思想传播之间的矛盾鲁迅有清醒的认识。瞿秋白在给鲁迅的信中也将“绝对的正确和绝对的白话”作为翻译标准，指出鲁迅翻译的《毁灭》“做到了‘正确’，还没有做到‘绝对的白话’。”瞿秋白的翻译标准本身同样暗示出译者作为“翻译主体”在译文传播对象面前的相对性——为了适应无产阶级群体的阅读水平而追求“绝对的白话”。此中包含着阶级问题与语言问题的直接关系，以及前者向后者转换的内在机制。论争双方对待“硬译”态度的一致性表明了现代汉语发展的必然要求。

与瞿秋白在《论翻译》中将赵景深与严复相提并论、全面否定不同，鲁迅在《论翻译——答J. K. 论翻译》中用“虎狗之差”来形容二者的距离，并指出严复翻译观的变化：“他后来的译本，看得‘信’比‘达雅’都重一些”。在近代翻译观念的历史脉络上，“硬译”本质上是“信”的另一种形式。鲁迅对严译《天演论》“桐城气息”的否定也关涉到主体性问题，即在弥漫着“桐城气息”的译本之中，现代汉语（白话文）的主体性在正统文体的压迫下完全没有建立的可能性。

对于鲁迅来说，翻译论争前后有关翻译的文字不仅包含着对近代之后中国翻译理论的反思，并且包含着对自留学日本时期以来的个人翻译历史的反思。在历史反思与现实论争的交叉点上，鲁迅重建起相对成熟的翻译美学观。论争两年之后的1934年9月，他与茅盾发起创办了《译文》杂志。

西周における性

清華大学 孫 彬

(一) 序章

「哲学」という概念の翻訳者としての西周（1829～1897）は「日本近代哲学の父」と言われている。西は西洋の哲学を初めて系統的に日本に紹介した人である。西による「主観」、「客観」、「理性」、「感性」、「現象」、「演繹」、「帰納」などの訳語は今日において哲学概念を表出するときに欠かせない表現になっており、広く使われている。

西が翻訳し、創造した哲学用語を見れば、東洋思想の独特な概念や範疇で表出したものは少なくないのである。例えてみれば、西洋の哲学概念や範疇を対訳するとき、西は始終東洋文化（特に儒家思想）の基本概念を訳詞の台木とし、その上に西洋カテゴリーという接木をしていたと言えるだろう。

前述したように、「性」という概念は東洋思想（特に儒家思想）の中で独特で重要なカテゴリーである。この概念は西周にとっても大変重要な概念である。この概念を使った西の新造語や訳語が彼のあらゆる著書や訳書の中に一貫しているのは特に注目すべきことなのである。性という概念を使った訳語や新造語としては、「理性」、「感性」、「覚性」、「作性」、「悟性」、「記性」、「性質」、「植性」、「動性」、「心性」、「靈性」などがある。それは西洋哲学のどういう概念の対訳として翻訳されたのだろうか。それらを西周は「性」という概念に対してどういう理解に基づいてそれらを対訳していたのであろうか。それはそれまでの東洋哲学概念の中での「性」とどういう関連があり、どういう区別を持っているのだろうか。

しかし、今まで西についての研究を概観してみると、彼の訳語と東亜伝統思想との関わりについてのものはあまり見られていない。したがって、筆者は今までの研究の空白である西周の「性」という概念を使った訳語のと東洋思想の伝承について研究を進めたい。西の哲学テキストを解読することによって、その中に出ている「性」を使ったキーワードを抽出し、それを分類し、時代的な順序で西の対訳の変化を探ることによって、西の翻訳過程に出た変化を解明し、そして、それぞれの表現の使われている文脈の相違からその概念の意味を明確にし、さらに、その言葉を東亜の伝統思想文化に使われている文脈と比較することによって、西の訳語が東亜の伝統思想文化との伝承を明らかにしたい。

(二) 性と「Nature」

「性」という概念は、東亜の伝統思想の中で、特に儒家思想の中で極めて重要なカテゴリーである。「天命之謂性」（礼記・中庸）や「性相近、習相遠」（論語）などの儒家經典の根本規定から分かるように、「性」というのは「天」という超越的な存在から授けられるものであり、「在天為命、在人為性」というように天道や天命を体現するものである。

西周においては、「性」の訳語として「Nature」が一番よく使われている。それは「初稟自然之氣」（王充）、「性即理」（朱子）などによって説かれている儒家思想における規定と一致していると思われる。

西における「性」という訳語に相当する言葉は、「property」、「faculty」、「attribute」などが挙げられる。それは「性質」、「官能」、「特性」、「属性」などの意味になっている。それはそれまで儒家思想の中の「性」という概念の含む意味とまったく違っている。それは西における「性」という概念の理解にはどういう意味があるか追究すべきである。

更に、英語の「instinct」という言葉は当時の『英和辞典』によれば、「性」と翻訳され

ていたのであるが、西周の翻訳にはそれを「本能」だと対訳されている。『生性発蘊』それは西の「性」という概念の理解にはどういう繋がりを持っているのかを究明する余地がある。

（三）性理と心理

「性理」という概念は儒家思想特に宋明理学において大変重要な哲学範疇である。朱子や程氏兄弟を代表とする理学家たちは「性即理」と説き、「理」を宇宙の本源と見做しているとともに、人性の本質だと考えている。それは朱子の以下の言葉によって窺うことができる。「性即理也、天以陰陽五行化生万物、氣以成形、而理亦賦焉、猶命令也。于是人物之生、因各得其所賦之理、以為健順五常之德、所謂性也」（『中庸章句』第一章）。

西における「性理」という概念の使用は二通りあると思われる。一つには「性理」に関する学問を「哲学」だ認識していることである。「津田真道稿本「性理論」の跋文」に「西土之学、傳之既百年余、至格物舍密地理器械等諸術（科）、間有窺其室者、特至吾希哲学（ヒロソヒ）一科、則未見其人矣……特自吾友天外如來始、今此論頗著其機軸、既有庠夫西哲而逸之者……」。この跋文からわかるように、西は津田真道氏が書いた「性理論」を「希哲学」に関する論述だと認識している。更に、注目すべきのは、「philosophy」の代名詞として、西は彼の友である津田真道を始め、当時の学者によって呼ばれていた「性理」という言葉の襲用を拒み、敢えて「希哲学」という言葉の使用を挑戦していることである。それは、西が「性理」という概念の理解にどういう関連があるか。

また、西は「性理」という言葉を「psychology」の訳語つまり今日人々に愛用されている「心理」の代用語として使用している。『生性発蘊』において、西は以下のように述べている。「性理学ハ英語 psychology、魂並ニ心ノ義ロジ論ノ義ヨリ來ル者ナリ、只之ヲ東洲ノ性理ノ字ニ比スレハ、彼ハ專ラ靈魂ノ体ヲ論シ、是ハ心性ノ用ヲ論スルノ差アリ、然モ大要相似タルヲ以直ニ性理ト訳ス」。更に、『致知啓蒙』の中に、性理の学を「psychology」や「mental philosophy」と訳している。

一方、西は「心理学」という訳語の創作者としてもよく知られている。しかし、西は今日のように「心理学」を「psychology」の訳語として使用しているのではなく、彼においては「性理学」を「psychology」、「心理」を「mental」の訳語として区別して使用している。例えば、『生性発蘊』の中に「英メンタル、又インステレクチュエル、爰ニ心理と訳ス」という記述がある。また、『心理説ノ一斑』中に「心理ノ学ハ、欧州ニテモ往昔ヨリ、メタフキシク、即チ無形理学ノ一部トシテ……」という記述がある。「メタフキシク」というのはドイツ語で現代日本語で「メタフィジック」といって、「形而上学」という意味になっている。

「性理」と「心理」という二つの概念は西にとって極めて重要な概念である。西においてこの二つの言葉の使用の区別を究明することによって西にとって「心」と「性」との区別が浮き彫りになると思われる。

（四）終章

「性」という儒学的な概念を借りて西周は西洋哲学の中の重要なカテゴリーを理解しようとしている。東洋的から西洋的へという西周の西洋哲学の理解する過程は必ずしも踏襲的、容易なものではない。氏は東洋的なものを借用しつつも、東洋的なものから抜け出そうとし、自分なりの理解を加えている。それは創造的な過程といってよかろう。このような西の努力と創造によって、今日使い継がれているたくさんの哲学概念が生まれることになるのである。

日本俳句的起源、形式与翻译

中国技术进出口总公司 田 建国

从日本定型诗的发展史看来，俳句取的是俳谐连歌一连串诗句中的第一句——“发句”的五七五形式，并最终演变成了独立的定型诗。俳句起源和发展的基本线路大致是：日本古代歌谣——和歌——短连歌（或称短歌）——长连歌（或称长歌）——俳谐连歌——俳谐（即“发句”）——俳句。俳句不但早期在形式上，而且各个发展时期还在内容上、理念上受到中国古典文学、诗歌以及历史和禅宗等文化的深刻影响。所以，由于渊源的关系，日本俳句不但在形式上，而且在内容上都受到了中国文化的巨大影响。俳句是日本人根据自己的兴趣、爱好、审美、情感等文化特质用古代日语模仿中国汉诗的形式特点（五言和七言）改造日本传统古典歌谣节律、韵调等形式结构的最终产物。

“五七五”是俳句在起源时先天地受中国古代诗歌和文化影响的结果，也正是俳句这种短小定型诗型的形式美和音乐美之所在；季语是日本民族的文化心理和客观自然感受力的结晶，也是俳句的精华之所在；断句字是日本民族语言心理和内心主观感受力艺术地外化为语言的独特表现，也是日本语言特征和语言美在俳句里的最经济最典型的集中体现。此三者乃是俳句之鼎的三足，缺一不可。惟其如此，才能在真正意义上体现出俳句的“约束之美”（或称“束缚之美”）。

如果说断句字的功能是通过“断句”来达到节奏美、韵律美并溶入作者情感、扩大想象空间之目的的话，那么只要这种功能在句中被用某种形式实现了，便可以说句中的这个“某种形式”就是断句字。这“某种形式”，如果是发得出音的字或词可以称之为断句字的“实形式”；如果在节奏、语流、情感或空间段落之后没有出现发得出音的字或词，则可以断定断句字在俳句作品中应有的功能被以无声的形式实现了。这种无声的形式可以称之为断句字的“虚形式”，或者叫做“零形式”。

语言翻译，是把传达某事物信息和载体自身信息（即内容）的原语载体（即原语语言符号）在尽量保持其意义（“某事物信息”和载体自身信息等的总和，包括文化意义）的质和量不变的前提下转换（即改变）成在传达功能和效果上尽量对等的译语载体（译语语言符号），尽量完整地传达原语言载体所承载的内容，使交际双方共同认知该事物，并使译语受者产生与原语受者尽量相当的感受或行为等反应，以促成不同语种之间有目的的言语交际活动（当期目标）的跨语际言语交际行为；是通过这种跨语际言语交际行为进而促成不同民族（国家）的文化交流，最终达到不同文化之间通过交流而相互影响直至彼此融合之目的（远期目标，亦即翻译的终极使命）的跨文化言语交际活动。

翻译的要义小而言之，在于切合操不同语言的交际双方的交际目的而改变语言载体——语言符号；大而言之，在于切合不同民族（国家）之间的文化交流、影响和融合之目的而改变语言载体——语言符号。在翻译中，作为载体的语言符号的改变和原作意义的再生是第一性的。

尽管既然有载体符号的改变，必然有意义上的损失，且这种损失在翻译诗尤其是定型诗时显得尤为惨重。但无论如何翻译的目的不在于改变语言载体——语言符号的行为本身。改变了语言载体就可以达到跨语际交际、跨文化交流之目的，其基础正是各种民族（国家）的文化之间客观存在着共性和可相容的一面；翻译可以促成不同文化的交流、影响和融合，其

原因恰恰在于不同民族（国家）的文化之间存在着个性（差异）和不相容的一面。毕竟一种文化的个性的和与其他文化不相容的一面，经过译者富于智慧的长期实践和译品，通过译品读者的学习、消化、掌握和应用，是可以逐步向共性和可相容性转化并最终成为全人类共同的文化财富的。

一个民族的语言不仅是这个民族文化的载体，同时还是这种文化的一个组成部分。反映在诗尤其是定型诗这种特殊的文学样式上，就是，在作品中，独特的语言形式因素（包括字数、音韵、行数、节奏、旋律及一些独特的语言和修辞技巧等）不但是内容（包括形象、意境、思想、感情、风格、神韵等）的载体，同时又是作者需要向读者传达的东西，是内容的一个组成部分，与内容相互高度依赖，有机结合，形成密不可分的统一体。

不论俳句的起源和发展经历了怎样的过程，俳句本身发生了怎样的变化，其最本质的东西没有变，那就是：小而言之，用最率真的语言表现最接近人类本能的感动没有变；中而言之，用民族文化的个性表现人类文化的共性没有变；大而言之，俳句这种定型诗承载本民族独特文化和人类共同的物质、精神文明的这一与生俱来的基本性质没有变。既然是这样，俳句（其他诗歌亦然）当然具有可译性，可以通过翻译进入其他文化并产生影响。

一种文化的原语定型诗的基本内容和大体风格可以通过语言符号的基本转换——翻译得到译语的基本阐述，从而通过译语读者的阅读和理解获得意义，进入另一种文化并获得新的生命；语言符号可以通过译者的操作实现基本转换，但在转换操作中，那些高度依赖于语言符号的语言自身信息、定型格式的各种因素和民族文化信息会因为语言和文化的差异而发生走失，走失多少与这些语言自身信息、格式的各种因素和民族文化信息等对语言符号的依赖程度的大小成正比。我们不指望一个译文本就能穷尽原文本的全部意义和价值并完成其全部功能，更不指望译文本与原文本在内容、形式、风格以及意义和价值上理想化的完全等值。我们用历史的观点看待翻译现象，现实地承认各民族间客观存在的思维、文化和语言方面的差异，肯定翻译在言语交际和文化交流中的局限性；承认人类思维、文化和语言方面客观存在的共性和可相容性，肯定翻译在言语交际和文化交流中的功能和所发挥的作用。我们力图建立科学、辨证、实用的翻译观，给翻译一个合理的定位，认为诗尤其是定型诗的翻译主旨不在于用译语阐释原语的形式，而是有限地放弃部分不可翻译的形式等因素以更好地阐释无限的原作内容，并在一定程度上体现原作的风格。

在翻译日本的俳句时，应采取这样的策略：一、译者的立场：以传达日本文化，尽量使译文读者了解俳句及具体作品的内容、风格和味道（可以叫“俳味”），获得与原文读者相同或相似的审美感受，促成围绕所译作品的跨语际—跨文化交流活动，为两国文化交流出力为最终目标；二、译者的态度：对原文及其作者、译文及其读者和译者本人负责，承认翻译局限性的存在，认可译作在不背离原作主旨的情况下产生局部性变形，并在此前提下发挥自身的主动性来创造译文，尽量鼓励译文读者参与作品意义（意境等）在译文中的再生并最终完成译作；三、译者的具体策略：兼顾形式和内容，但不得已时也允许文化差异和语言差异在一定程度上的走失（部分舍弃原文语言形式及其所承载的内容），在译文中尽量完整而真实地再生原作的意义以反映原作风格，尽量传达原作的文化内容，亦即放弃部分过于个性化的东西，力保传达一般个性和共性的东西；四、译者的操作方法：译文不过分拘泥于形式（字数、行数、韵脚、节奏等）和语言（文言、白话等），总体依原作者意图、原作内容和风格、原作文化背景在译文中的表现方便而定。在反映原作意象跳跃或并置等这类使俳句之所以成其为俳句的极高境界的典型特点方面，我们建议采取尽量保留跳跃或并置等及其所营造的联想、

余韵、余味甚至余白而不加更多自己的理解的办法，希望能够在大多数读者可以理解的情况下多传达一些原汁原味的东西，以便更好地把作者、译者、读者结合起来，共同完成译文本意义的再生，使原作在翻译中涅槃并通过译作和译作读者的阅读获得新生。同时，我们建议在译文形式上不必更多拘泥，可以选择多种尝试，目的是给读者留出比较的空间，便于大家批评并提出意见和建议，共同为我国的俳句翻译的繁荣做出贡献。

日本における異文化コミュニケーション研究の歴史と現状

広島大学 盧 濤

1. はじめに

本発表は、30 年ほどの歴史を持つ日本の異文化コミュニケーション (intercultural communication) 研究を 4 つの時期に分け、日本における異文化コミュニケーション研究の流れを追いながら、その特徴と問題点の分析を試み、今後の研究課題と可能性を検討することを目的とする。4 つの時期とは、1) 70 年代までの導入期、2) 80 年代の模索期、3) 90 年代の発展期、4) 21 世紀初頭の新展開、である。

2. 70 年代までの導入期

すべての研究領域がそうであるように、日本における異文化コミュニケーションの研究は、欧米とりわけアメリカからの影響が強く、1960 年代前後にアメリカで芽生えた研究の紹介や翻訳から始まった。異文化コミュニケーション研究の父とされるホールによる一連の著作の翻訳が日本における異文化コミュニケーション研究の発端とも言える。翻訳された文献から得られた知見が日本における異文化コミュニケーション研究に多大な影響を与え、各時期の研究手法にはその痕跡が見られる。70 年代までの導入期には、日本人による研究として、中根 (1967)、土居 (1971)、鈴木 (1973) などを挙げるができる。

3. 80 年代の模索期

1980 年代に入ると、異文化接触、異文化交流が盛んになってきた。80 年代も欧米文献の翻訳は相次いで刊行され、異文化コミュニケーション研究の模索を加速させた。日本なりの研究の模索が始まった象徴的な出来事として挙げられるのは、次々と創立された異文化コミュニケーション関連の学会や組織である。1981 年に「異文化間教育学会」、1985 年に「日本コミュニケーション学会」、「異文化コミュニケーション研究会」、1989 年に「日本コミュニケーション研究者会議」、1983 年に神田外語大学附属「異文化コミュニケーション研究所」(「異文研」) ができた。そして、1982 年に国際基督教大学に「コミュニケーション専攻」が設けられると共に、幾つかの私立大学で異文化コミュニケーション関連の授業が開講され、私立大学が異文化コミュニケーション教育をリードしてきた。その中で、関する論文や書物が多く公刊されたが、直塚玲子 (1980)、岡部郎一 (1988)、西田ひろ子 (1989) などがよく言及される文献である。日本最初の概説書とされる古田監修 (1987) や、古田他 (1990) が 80 年代における異文化コミュニケーション研究模索の総まとめの一部と言える。また、具体的な問題としては、言語コミュニケーションや、組織、企業、国際ビジネスに関わる日米ビジネスコミュニケーションがよく取り上げられた。分析手法を模索しながら、研究体制が整えられていった。

4. 90 年代の発展期

時代と社会のニーズに応えるかのように、90 年代は模索期から発展期に入っていた。「異文化」と「異文化コミュニケーション」用語の定着もこの時期であった(表 1 を参照)。ホフステーデ (1995) などの欧米文献が数多く翻訳され、国際ビジネスへの関心が強まった。特に 90 年代半ばから、中国やアジアに目を向ける気運も高まり、異文化ビジネスコミュニケーション研究の一環として関心が集まった。この発展期において、日本人による

概説書のようなものも多くあったが、1997年に出版された総勢26名の研究者の共同作業である『異文化コミュニケーション・ハンドブック』は、異文化コミュニケーション研究に関する基本的な考え方、指針を示したものとして意義が大きい。教育の面においては、高等教育の改革の中にあって、異文化コミュニケーション関連の多様な授業が生まれ、「英語一辺倒」、「アメリカ一辺倒」が打破された。大学院教育も多様化し、名古屋大学、神戸大学、広島大学に「国際協力研究科」が新設され、国立大学の大学院レベルにおける異文化コミュニケーションの教育と研究は、新しい局面を迎えたことで大いに期待されていた。

5. 21世紀初頭の新展開

21世紀に入ると、「生きる力」の育成が提唱され、日本の教育現場においても、実際の運用能力を意味する「力」の育成に重きを置こうとしている。異文化コミュニケーションも、「異文化コミュニケーション力」、「異文化ストラテジー」、「異文化リテラシー」、「異文化力」というように、理論的研究が更に進もうとする中で、実践を重んずる傾向が強まった。とはいえ、2001年に異文研で編纂した『蔵書目録』が公開され、石井敏他編『異文化コミュニケーションの理論』と『異文化コミュニケーション・キーワード[新版]』が出版され、90年代の異文化コミュニケーション研究の進展と21世紀の新しい展開を示すものとして高く評価される(表2、表3、表4を参照)。その他に、西田ひろ子(2000)や西田司(2004)なども専門書として注目に値する。また、2005年に異文化コミュニケーション研究に関する日本初の方法論の専門書『異文化コミュニケーション研究法：テーマの着想から論文の書き方まで』(石井・久米編)が出版された。分野が異なる10名の研究者による共同作業ではあるが、日本において構築された異文化コミュニケーション研究の一部を反映させたものとして、関心が寄せられている。それと、多文化企業経営または外国人労働者の問題に関する研究や、異文化コミュニケーション研究の一環としての日中コミュニケーションに関する研究も注目された。その他、2002年に発足した「多文化関係学会」と2002年に立教大学に開設された日本初の「大学院異文化コミュニケーション研究科」も、異文化コミュニケーション研究の新展開を促すものとして期待されている。

6. 終わりに

日本の異文化コミュニケーション研究は、大きな発展を遂げたが、必ずしも成熟した研究体系を形成していない。問題点が4つある。1) 関連する書物には共著、共編著の類が多く、チームワークによる研究成果が中心となっており、単著で広く使われる汎用性の高い概説書は少ない。これは異文化コミュニケーション研究の多面性、学際性を意味する一方、研究の体系化、理論化が実現していないことをも意味すると解してよかろう。2) アジアなどの広域文化に目を向けた研究も徐々に成果を出しているが、依然として理論的・方法論的にアメリカ型に偏向し、異文化の対象も欧米文化に偏重しがちである。3) 語学・外国語の教育者、研究者またはその経験者が研究の主担当者になっており、言語コミュニケーションとりわけ英語コミュニケーションのコード分析と国際ビジネスコミュニケーションという特定のコンテキスト分析に偏っている。4) 私立大学在籍の日本人研究者・教育者が異文化コミュニケーション研究の主力となっており、アカデミズムに傾く国立大学教員や外国人研究者の参加が少ない。異文化コミュニケーション研究はアカデミック的市民権を得るには、まだ時間がかかりそうで、多文化を射程に入れた多元的な異文化コミュニケーション研究の確立はこれからである。

表1、2、3、4 引用・参考文献(略)

日本内容产业的现状分析及其国家政策

北京外国语大学日本学研究中心 吴 咏梅

世界中における日本アニメ「ポケモン」や「デジモン」のヒット、宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」が2002年のベルリン映画祭でグランプリを、2003年のアカデミー賞の長編アニメ部門のオスカーを獲得したことや、「ブラックキングダム」などの漫画がハリウッド映画に製作されたり、「リング」、「ドラゴンボール」などの映画が版權再販売の形でハリウッドと契約を結んだりすることで、1990年代以来、日本のアニメ、漫画及びゲームなどのポップカルチャーは、日本国内だけでなく国際的にも広く人目を集めるようになった。2002年、アメリカの政治分析ジャーナリスト Douglas McGray が「日本国民総精彩 (Gross National Cool)」という文章を発表し、漫画、アニメ、ゲームなどの日本コンテンツが世界に与える影響力を高く評価し、日本は「無国籍」という特性を持つこれらの文化商品を世界中に流通させることによって、アメリカに次ぐ文化大国になったと指摘した。

ハーバード大学ケンネディ学院 Joseph Neil 教授によると、一国の文化的魅力は、その国の政治や経済目的に寄与できるソフトパワー (soft power) の源泉になりうるという。ソフトパワーを構成するものは一国の無形的な精神力、すなわち国家的価値観、文化魅力及び国際社会における課題設定の能力である。今日のような総合国力競争の中において、国の地位を守るために、経済力、軍事力などのようなハードパワーを大幅に発展する必要があるばかりでなく、コンテンツ産業をはじめとするソフトパワーも促進しなければならない。デジタルテクノロジー、インターネットの飛躍的な発展は、知的財産としてのコンテンツを日本の経済を牽引する新たなリーディング産業に成長させつつある。

本論文において、筆者は、日本のポップカルチャー産業（コンテンツ産業）の現状と国家政策を概観してみたい。まず、漫画、アニメ、ゲームなどのポップ文化産業を例にして、日本のコンテンツ産業の行動を説明する。次に、その産業面や社会文化面における日本の特色を説明し、デジタル技術とポップ文化との関係を分析する。以上を踏まえる上で、日本のコンテンツ産業に関する政策や業界の発展趨勢を論述し、中国の文化産業に対する示唆を考えてみる。

一 日本的流行文化和内容产业现状

1. 流行文化和内容产业

流行文化：是与古典文化、传统艺术和贵族文化相对抗的大众文化，其类别包括漫画、动画、电玩游戏等日本所擅长的领域、电影和音乐等美国所擅长的领域、网络 and 手机等数码技术的新领域以及时装、玩具、体育和风俗等媒体内容以外的领域（中村伊知哉 2004 年）。

内容产业：内容，即给人们的精神带来满足感的“信息”，是以电脑、游戏机以及其他家电产品的平台为前提而被利用的知识产物的总称。美国把知识内容的生产行业包括出版、软件、信息服务等称为“内容产业”。而在日本，广义上的内容既包括娱乐性比较强的信息财产，即电影、电视节目、音乐、出版物、电玩游戏、数码艺术、表演艺术和专业体育等，也包括以信息服务为主的电子商务、手机通信、远程教学和远程医疗等非娱乐产业部分。

2 产业动态

世界的媒体内容市场的规模：2000 年约为 100 兆日元

日本的内容市场，2001 年约为 12 兆日元，为世界第二，约为美国市场的 30%

内容产业在国民生产总值中所占的比重：日本 2%，美国 5%，世界平均为 3%

日本具国际竞争力的内容产业：漫画、动画片和游戏，市场规模达 3-5 兆日元。世界的内容产业市场的 100 兆日元中，日本漫画、动画片和游戏的市场规模是 34 兆日元，大致是整个内容市场的 30%。

音乐、电影、出版等娱乐产业有缩小的趋势。但手机、网络等新型内容市场以及电子商务和远程医疗等非娱乐市场的发展很有前景的。

二 日本内容产业的特色

1 市场的多样性和融合

2 风险企业和大资本：

流行文化产业，其风险产业的色彩比较浓厚；承担流行文化产品流通的电影、电视、广播、包装出版和通信等行业，都是大资本垄断或接近于大资本的产业结构

3 社会文化背景

日本动漫和游戏产品的故事编写和表现手法，可以追溯到 12 世纪的画卷和近代的浮世绘，是一种庶民文化。

深厚的读者层、立足于审美观的创造力是日本流行文化产业发达的基础。

动漫和游戏的狂热爱好者“御宅族”的存在是日本流行文化之所以具有丰富表现力的保障。性表现和暴力表现泛滥是日本流行文化的一个特征。

三 数码技术和流行文化

1 市场和种类的扩大

互动、CG、3D、网络游戏等动画和游戏的新表现形式，电子邮件、互联网、手机网、来电音乐、照片邮件和录像邮件等新的商业

2 从专业人员到业余从业人员的发展

4 数码流行文化

Ubiquitous computing

拟人化

动漫和游戏人物形象的商业运用

四 内容产业政策

“e-Japan 重点计划”

“软性权力时代”日本内容产业的国家战略

目标 1 从资金、人材和技术等方面对产业进行基础设施建设，进一步推动内容产业的近代化和合理化

目标 2 对业界的活跃人物给予荣誉和奖励，把内容产业建设成为主导社会的支柱产业

目标 3 大力开拓海外市场和新市场

異文化認知における「日本概況」の役割

北京第二外国語学院 周 潔

「ことばを教えることは文化を教えることだ」とよく言われるが、本発表ではまず、異文化理解における重要なテーマである異文化認知がなにかについて述べ、「日本概況」という授業は異文化認知においてこういった役割を果たしているのかについて追跡アンケート調査を通して分析し、「日本概況」授業の不足と課題を提起する。

キーワード：認知、異文化、日本概況、追跡アンケート、役割

一 問題提起及び本発表テーマの意義

一般的には異文化コミュニケーション研究の基本目的は三つあると考えられている。第一は、空間と時間の両面で縮小の一途をたどる現代世界に生きる人間の共通課題である異文化相互理解に対する積極的態度の養成と、世界的展望を持つ人間観の確立である。この目的を達成するためには、自文化と様々な異文化の特性を客観的に把握し、相互理解のための方策を講じることが必要である。第二は、異文化との接触に必要な適応力の養成である。新しい文化に触れた人間が経験するカルチュア・ショックを克服して活動するための対応策の研究は今後一層重要になる。第三は、学校や職場における教育の一部をなす実際の異文化コミュニケーション技能の養成である（古田暁監修，2004年）。

中日交流には長い歴史を持っているにもかかわらず、文化による摩擦や不理解などは未だによりよい中日関係を構築する上での主な障害になっている。異文化理解の困難さ、重要さが再び浮き彫りにしている。

本発表では以上の問題意識を念頭に、まず、概念上に知覚、意味の付与（認知）はどういう意味を持っているのかについて述べ、文化の構成要素の角度から「日本概況」の授業内容を検討し、日本概況の役割、問題点、課題などを提起する。

二 知覚、意味の付与（認知）

知覚は各自の個人的、文化的背景に基づいてコミュニケーターを選択することである。

コミュニケーター無数の外的刺激の中から必要なもののみを感じ、知覚器官で受容（sensing）して、それらに意味づけ（making sense）をする。この段階を意味の付与と言う（古田暁監修，2004年）。異文化コミュニケーションの中で、同じ行動でもそれをどのように意味付与するかは、他人がその行動をしているのをみる観察者の立場か、自分がその行動をしている当事者の立場かでまったく違ったものになる。

三 文化の構成要素

異文化を理解するためのパラダイムとして、文化の構成要素が言語、宗教、価値に分けられている。

P.アリス（P.Harris）、R.モラン(R.Moran)らは共著『異文化経営学』において、文化のアイデンティティを決める要素を、10のカテゴリーと8システムに分類している。10のカテゴリーは単独で文化を構成するものではなく、相互に関連を持っている。これにつ

いて、アリスとモランは「これらすべての側面が相互に密接に結びついているだから、一部を変えれば全部が変わってしまうことを忘れてならない。文化という概念は極めて複雑なものであるから、それを区別してしまえば、全体性が失われてしまう危険性がある。文化を見る時には、宝石を鑑賞するような態度が必要であろう。いろいろ向きを変えて、我々の意識という光をあてながら、人間の多様性、能力をいわば賞味するのである。」と述べている。(P.アリス (P.Harris)、R.モラン(R.Moran), 1983 年, p 98-99)

以上のような異文化知識(10のカテゴリと8システム)を学生達に教えるのは日本概況の役目である。

四 「日本概況」の内容、役割、問題点

長谷川は日本事情は一種の教育活動であり、日本という異文化をどのように異国の学生達に理解させ、また、どのように異文化に対応する能力を養わせるのかは日本事情教育の目的であると総括している。(長谷川恒雄, 1999 創刊号)

本発表では北京第二外国語学院の日本語学部を例に、日本概況の内容を紹介する。

さらに、1999 級の学生達(69 名)を対象に行われた追跡アンケート調査を手がかりに、「日本概況」という授業は、異文化学習の場で、こういった役目を果たしているのかなどを分析し、そこから、専門知識を持っている先生の不足、授業時間設定の問題、授業使用言語の選択問題、授業形式の単調性などの問題点を指摘した。さらに、映像、スライド、グラフなどの教学手段の導入、学生による小論文のまとめ、専門学者による定期講座の開催などが今後の課題として提起する。

参考文献：(ア行順)

P.アリス (P.Harris)、R.モラン(R.Moran)：『異文化経営学』，ペリカン社，1983 年。

角田三枝：『日本語クラスの異文化理解—日本語教育の新たな視点』，くろしお出版，2001 年。

周洁：〈异文化的认知与语言意识—从社会学的视点思考〉，《北京第二外国语学院学报》，2000 年第二期。

——：〈日本概況課の几点思考〉，《北京第二外国语学院学报》，2004 年第六期。

縫部義憲編著：『多文化共生時代の日本語教育』，歴々社，平成 14 年。

長谷川恒雄：「日本事情」—その歴史的展開，21 世紀の『日本事情』編集委員会編，『21 世紀の「日本事情」—日本語教育から文化のリテラシーへ』創刊号

飛田良文：『異文化接触論』，おうふう，2001 年。

古田暁監修、石井敏等著：『異文化コミュニケーション』，有斐閣，2004 年。

細川英雄：『日本語教育と日本事情—異文化を超えて』明石書店，1999 年。

————：『日本語教育は何を目指するか—言語文化活動の理論と実践』，明石書店，2002 年。

「政冷経熱の」実態と危険性

——1914-1945 年の中日経済貿易関係について

対外経済貿易大学外語学院日語系 黄 栄光

第一次世界大戦の期間中、欧米諸国はアジアへ勢力を伸ばす余力がないことから、日本は思う存分に中国において活動を展開した。また、第一次世界大戦から第二次世界大戦終了までの時期は日本の対中侵略が一番露骨化した時期であった。歴史的に有名な事件の続発した時期でもあった。対中 21 ヶ条、済南出兵、ベルサイユ講和会議での山東権益にまつわる中日代表の攻防、9.18 事変、7.7 事変およびその後の 8 年にわたる抗日戦争は周知のとおりである。近衛文麿の「蒋介石政府を相手とせず」宣言が代表しているように、水面下での裏工作の存在にかかわらず、両国の政治関係はきわめて危機的な時代であった。20 世紀の 10 年代からメディアと学校の教科書に反日的な内容が現れるくらいに中国国民の対日感情が悪く、事あるごとに「日貨排斥」運動が展開されたものだった。これと対照的になるのは、両国の経済往来の規模の拡大である。精確に表現すれば、日本のちゅうごくにおける経済活動が活発になる一方であり、輸出入の規模も量と金額的にみれば拡大を続けていた。

この時期の経済貿易関係を「侵略」という一言ではもちろん片付けられない。外交交渉の過程や戦争における攻防に関する研究と同じくらい重要だと思う。いや、エンゲルスの「世の中のあらゆる物事の究極的な原因は経済的要素に求めるべきだ」という原則によれば、むしろ、両国の経済関係の研究は優先されるべき課題であろう。

もっとも、筆者が最初にこの課題に目をつけたものではない。中国の経済学者は近代中国経済史や中国の対外貿易史の著作で日本の在華企業——たとえば横浜正金銀行、三井物産や、日本の勢力が中国の税関に対する浸透を紹介してある。一番権威的な結論は「日本在中国发展的特点为：强大的财阀背景，重视资本积累，投资结构的严密和系统的完善，高利润和大兼并」（汪敬虞主编《中国近代经济史 1895-1927》p531）「正金银行的地位受到朝鲜银行、台湾银行和兴业银行的挑战（同上 p376）」とある。個別会社の経済活動については数多くの先行研究がある。一番代表的なものは高村直助『近代日本綿業と中国』であろう。

しかし、両国の経済貿易関係（ここでは国際的な貨物取引、直接投資と経済的な権益にかかわる借款を含む）を産業構造、国内経済上の要求、外交環境と政治情勢、特に前二項に基づいて整理するものが存在しない。筆者は中日両国における政府の対応、国力の消長、貿易品構造の解明、及び両国の市場特に中国市場における国際競争関係が立体的に見える構図を試みたい。と同時に両国の経済貿易実務を担う主役の移り変わりも描きたい。

視点と手法：

一、貿易量の把握。両国がそれぞれ相手国の貿易パートナーとしての位置づけ、量の相対的变化（金銀レートの変化と関連あり）、品目の変遷を『大日本貿易統計』と清国の『海

関統計』などにより解明する。ここでは太平洋戦争開始の 1941 年より、日本は米国市場や英国市場へ輸出していた農産物等を中国市場に輸出していた現象は一番注目に値するものである。

二、両国の対外貿易政策と外交環境との関連をチェックする。日本政府の経済政策とりわけ対中貿易の政策に注目したい。中国については、輸出振興輸入防圧あるいは輸入代替品の生産に関する。時期区分を試みると、各時期の政治と経済関係の象徴的なものは次のとおりである。1) 1914-1928 年：対中 21 ヶ条と日貨排斥運動。青島税関日本人税務司の派遣、日本の綿紡績企業は日本における労賃の上昇や労働法の実施により、中国を生産基地とする。三井物産は中国人生産者に対して生産資金の前貸しを開始した。1928 年の上海地図に日本系企業はびっしり詰まっていた。2) 1929-1937 年：中国の関税自主権回復の努力により、中日関税協定が 1929 年に結ばれた。これより前に東北市場では別の関税規定が実施されていた。日本にとって中国の東北地区の特殊性が現れたものであった。9.18 事変の経済的背景と意図。日本政府は引き続き領事報告制度を利用して中国の経済事情の調査や、輸出企業のためにマーケット情報を収集していた。3) 1937-1940 年：日本の対中経済侵略の本格化。『東方雑誌』の記事や『中国税関史』の記述あるいは日本新聞記事と関連研究から拾える事例は数え切れない。4) 1941-1945 年：1941 年に岸本広吉は中国税関の総税務司に就任した。日本人の長年の悲願の実現である。中国に対する経済侵略の全面開始であった。一方、英国や米国から輸入されていた生産資料とエネルギーが断絶し、日本の生糸等の輸出品も市場を失った。名和統一氏のいう「貿易 3 環節」の崩壊であった。代わりに中国市場に輸出を行ったが、経済のサイクルはこれで維持できなくなった。

三、日本については 1) 主要対中輸出品目の変遷とその産業的な背景 2) 外交交渉による利権の獲得 3) 対中借款の目的と統計 4) 金融業の中国における発展とイギリス資本の香港上海バンクとの比較 5) 運航業の中国における展開 6) 商社の発展と経営方式 7) 在華紡の状況（イギリス系の経営と比較） 8) 経済陣の中国に対する 2 つの見方、それぞれ政友会と民政党に代表される、を検討する。

四、中国については 1) 主要な対日輸出品目の変遷とその産業的な背景 2) 政府の外交努力と広州国民政府の借款に望む態度 3) 組織的な日貨排斥運動とその背景と効果 4) 「中華物産総図（1930-31 年版）」の編成が象徴する産業振興の意欲と政策 5) 産業発展のインフラとして金融機関と法規の整備 6) 工業の発展。金価の高騰により、銀通貨国として輸入が不利になる圧力から工業を発展させる受身的な原因と産業救国の積極的な要素があった。7) 農業の商品経済化 8) 鉄道と国内運航業の発展、などを検討する。

以上を通じて、両大戦期間中における中日経済貿易史の全貌を明らかにしたい。

从“鬼”的寓像意义浅释日本文化的混合性

上海工商外国语学院 杜 勤

在日语中关于“鬼”的俗语层出不穷，隐含其中的“鬼”的寓像意义可谓扑簌迷离，莫衷一是。其中有的完全是负面的含义，象征着邪恶凶暴，如“鬼が出るか仏が出るか”、“鬼の首を取ったよう”“鬼の居ぬ間に洗濯”“鬼の空念仏”“鬼に衣”“鬼婆”；“鬼に金棒”、“鬼の霍乱”这几个俗语中的“鬼”则是勇猛健壮的化身。“鬼の目にも涙”“鬼も十八、番茶も出花”，这些熟语中鬼的寓像意义虽然带有负面的成分，但却富有生活情趣。植根于民众生活中的“鬼”又无不让人感到几分温存和亲切，河滩上扁平坚硬的大石头，日语叫做“鬼板”，日本人小时候都大概玩过“鬼ごっこ”的游戏。另外提到“仕事の鬼”，则是对某个人的敬业精神的极力称赞，找不到丝毫负面的影子。不难看出，“鬼”在日本文化中的意义具有显著的多元性，各种各样的寓像混合交织成它的立体构图，“鬼”的寓像意义经历了历史的演变，至今仍然活跃在日本人的现代生活里。

本文通过日本人关于“鬼”的寓像意义的解析，阐述日本文化的混合性产生的思想根源，并从宗教、神话、建筑式样等方面入手，论述日本文化混合性的各种表象，并以语言形式为透镜，反观日本民族心理、社会习俗、宗教信仰、价值观念和审美情趣。

一、混合性“鬼”像产生的思想根源

在日本人的心目中，虽然鬼具有邪恶的一面，同时也存在神的一面。它在给人类带来灾难，对人类实行惩罚的同时也会保护人类。善与恶并不是对立的，而是作为双重的身份相互融合。这是日本人关于善恶的一种思维方式的印记，同时也是“鬼”的各种不同寓像意义产生的思想基础。日本人自古以来一直把山、海看作异界，是神和妖怪居住的地方。日本人由于文化的后进性、独特的封闭式的地理环境、单一化的民族构成和社会结构，对异界以及异界的统治者“おに”，总是既排斥又向往，这种矛盾心理形成了现代日语中对“鬼”的认知上的混合性和多元性。

二、日本神话中的混合性

在日本神话体系中，天照大御神和须佐之男命中的任何一方都没有被打上完完全全的恶的烙印，或贴上完完全全的善的标签。善和恶、正义和邪恶的价值判断是相对的，相互矛盾的两种性质浑然一体互为同一人物的表里，勾勒出其形象特征的全貌。生死的循环反复与基督教以及佛教的生死观大相径庭，基督教社会中的天堂、佛教社会中的极乐世界、地狱是与今世完全隔绝，彼此间不存在互通性。可以说日本神话体现出矛盾双方的混合性，昭示出“方

生方死，方死方生”这一辩证法的逻辑思维。

三、居住空间的混合性

在传统的日式住宅中，“縁側”“床の間”往往是备受重视的间接性中间混合性居住空间，其生活意识是建立在这种不同事物的交融糅合的混合性之上。纵观西方文明，人与自然、主体与客体、上帝与恶魔、敌与我无不处于矛盾对立的关系之中，容不得任何妥协调和，遵循着非此即彼的价值判断的取向。而在传统的日式住房中，我们却看到的完全是另一种情形：对立的双方可以找到某个交汇点，彼此间可以互相接近，渗透融合。通过传统的日式建筑的结构分析，也能看出东西方二元论的截然不同之处。

四、日本人宗教信仰中的混合性

日本的神灵被称作“八百万の神”，众多的神灵分工不同，各司其职各行其道和平相处并行不悖。日本的“かみ”一词是泛神的概念，其内涵不同于英语所说的唯一绝对的万能的“GOD”。日本人的宗教意识也是建立在混合主义的基础之上的。没有像中国的儒教和西方的那样具有强烈的意识形态或排他性。发达起来的是诸如茶道、花道之类培养个人灵性和感悟性的仪式。日本的信仰具有无原则兼收并蓄的特点。中国的儒家思想、道教，印度的佛教以及近代西方基督教及其其他各色思想、信仰，都在日本和平共处。日本固有的信仰是神道，但是6世纪中叶，从百济传入佛教以后，神佛便以各种形式互相渗透交融。日本宗教史上的“神佛习合”也无不反映出日本人宗教信仰的多层性和混合性。